

(二〇一九年度)

5 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は19ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人間の生活を自然と文化の両極に分け、その間に多様な生活の姿を生み出すのはリズムの両義的な構造にほかならない。生活が自然に近づくかより文化的になるかは、リズムがより受動性に傾くか能動性を強めるかの違いによる。生きかたが受動的に流れれば流れるほど、それはより多く自然の反射現象にしたがうことになり、生物的人間の生きかたに近づくことになる。それによつて生活が真のリズム構造を帯び、受動性と能動性がほどよい均衡を保つとき、それは文化的な生活になると見ることができるところでこのように見ると、一方それとは逆に能動性の比重が過度に大きくなり、生活の意識化が極大に近づく場合も考えられるはずであつて、ここにも一つの生活のかたちが成立すると想定することができる。これはいわば人間が生活を主体的に操作する生きかたであり、すべての行動を自覚的に秩序づけ、その構造をほとんど規則にまで固定した生活様式だといえるだろう。規則は集団に共有されると制度となり、やがて法やマニュアルとなつて普遍化するだろう。じつさい人間は一面で広くそうした生活を営んでおり、そのことを自覚しているのであつて、振り返ればそういう生活を「文明的」と呼んでいるのではないだろうか。

言葉をかえれば、三つの生きかたを区別するのはリズムが内に含む緊張強度、すなわち流動性と拍節の力の均衡にほかならず、その意味でまさに同一の性質の程度であると見ることができるといえる。流れと拍節がほどよく均衡し、リズムが緊張していれば生活は文化的になり、拍節が弱まつてリズムが弛緩すれば、生きかたは自然に埋没する。逆に流れの力が弱まつてリズムが硬直し、機械的、図式的な規則に変われば生活は文明化すると考えられる。当然、三つの生きかたは連続的、漸層的な相違を見せるだけであり、より自然的、より文化的、より文明的といった中間形態を示すこともありうるだろう。そしていうまでもなく、このような意味での文化と文明は集団単位ではなく、むしろまず個人の生きかたのなかにこそ成立すると考えるべきだろう。

こうした見渡しのうえであらためて観察すると、個人の生活のなかで純粹に自然的な現象の領域はきわめて限られているこ

とがわかる。おそらく内分泌を始めとする身体内部の現象を除けば、外に見える純粹に無条件の反射は瞳孔の変化くらいのものであろう。光をあてれば縮小し、暗がりでは拡大する瞳孔の反応は、たしかに文化的な条件とも人間の個性とも関係がない。だが先にも見たように、唾液の分泌となるとすでに文化の制約のもとにあつて、美味に関する伝統的通念や、きれいな汚いについての社会的常識に決定的に左右される。食物についてのタブーを見れば明らかだが、社会ごとの慣習的な規制は身体に組みこまれていて、唾液分泌の反射現象に直接に作用している。タブーとされる食物は反射的に吐き気さえ誘うのであつて、そこに起こる刺激と反応の関係はほとんど自然科学的であるようにみえる。逆にいえば自然科学的にみえるたいていの人間の現象は、すでにそのなかに文化の側面を含んでいるのである。

くしゃみや咳のような無条件の反射も、その発作の機構は生理的であるが、発作の現れかたは半ば意識の統御のもとに置かれることは、つとに観察した。そして半ば意識的に反復される生理現象は、やがておのずから運動のリズムを形成するだけでなく、しだいにそれをみずから模倣するようになることも、すでに述べた。日本人ならくしゃみは「はくしよん」、咳は「ごほん」といったリズムを意識下で意識し、それをなぞるように反射現象を統御し始めるのである。そこにはいわば意識的な表現の最初の萌芽が見られるのであつて、場合によってはそれが演技的なくしゃみや咳に移行することもある。喜劇的な効果をねらつて大袈裟なくしゃみをする人もあれば、他人の注意を惹くために嘘の咳をする人もある。とくに咳はくしゃみ以上に統御可能な反射であることから、いわゆる咳ばらいというかたちで純粹に意識的な行動へと転化されやすい。「警咳」という成句が示すように、咳はその一部で言語の領域に近づき、高度に文化的な水準に達する可能性を秘めているのである。

だが運動の意識化の可能性の程度、いかえれば能動的な制御可能性の程度という観点から見ても、くしゃみや咳はまだ文化成立の原始的な段階にあるというべきだろう。二つのなかでは咳はくしゃみよりもやや文化的だが、しかしたとえば泣くこと、笑うことに比べれば、その表現力の多様性ははるかに低いからである。泣くことも笑うことももちろん一面で反射運動であり、逆らいがたい自然現象であるのは疑いない。こみあげてくる涙は抑えようがないし、発作的な笑いはほとんど痙攣的に襲ってくる。じつさい笑いは純粹に肉体的な操りによつても誘発され、咳やくしゃみと同じ次元の無条件反射として起こる

ことも多い。しかし、その発現の過程を意識が制御しようという点において、泣くことも笑うこともきわめて X であつて、ほぼ Y に匹敵する多様性を示すのである。

まず泣くことだが、これが「すすり泣き」から「号泣」にいたるまで、運動の量と質にわたる広い変化を見せることは誰もが知っている。しかも、その運動量は必ずしも内面の悲しみの程度には比例せず、むしろそれを他人に表現しようとする意欲の強さに相関していることは、疑いない。質の点でも泣く行為には微妙な陰影が伴い、たんに悲しみの表現と呼ぶのでは不十分な多彩さを示すことも明らかだろう。泣く人はこみあげる涙の反射をいったん内側に堰とめ、あらためて能動的に吐き出すのであつて、泣き声には悲しみ以上の多様な感情的意味がこめられることになる。恨み、怒り、甘え、巧まれた同情の要求、自己防衛、責任の放棄、完全な屈服など、言語表現の及ばない無限の表情が泣く行為を彩ることになる。そこから泣く人がさらに能動性を強め、純粹に演技的な泣くこと、嘘泣き、泣きまねに転じるのは紙一重の移行なのである。

注意しなければならないのは、しかし、この能動性があくまでも受動性と一体であり、むしろ受動性に乗せられてのみ働くということだろう。どんなに巧まれたコケティッシュなすすり泣きでも、人はまずこみあげる真の思いを胸中につくり、それに迫られて泣くのでなければコケティッシュでさえありえない。最初に何の感情の衝迫もなく、外形だけを模倣した泣きまねもあるが、それは子供の遊びの世界でしか意味を持たない。優れた職業俳優が舞台上で泣く場合は、必ず内に切迫する悲しみそのものから模倣を始め、それがいわば自動的に生理機構に作用するのを利用している。現実には胸がつまり、鼻の奥が痛み、しばしば涙さえ流れる過程に襲われながら、それを美しいかたちに制御するときに芸術的な演技が生まれるのである。泣くことはまさにリズムの両義性を帯びて成立するのであつて、劇場はもちろん現実においても、すでに厳密な意味で文化的な行為だといえるだろう。

だが笑いはそれ以上に能動性の強い営みであり、行動が自分自身を範疇化する力においても、泣くことを上回っている。泣くことの場合、その多様性はまだ微妙な陰影の違いに留まつていて、それを読み取る側でも区別を明快な言葉に移すことは容易でない。けだし甘えと巧まれた同情の要求、自己防衛と責任の放棄の差は曖昧であり、むしろその曖昧さのなかに泣くこと

の訴求力の強さがあるともいえるだろう。これにたいして、笑いはより厳密にみずから統御された行為であつて、そのために表現のかたちそのものが概念的な一義性に近づくことになる。笑う人にも見る人にも、笑いはそれが意味するものを明快に表し、しかも意味内容はほとんど正反対の極におよぶ多様性を見せる。笑いの意味を一本の軸のうえに置いて見れば、中央に共感、親愛、同意の笑いが互いに鮮明に区別されながら並び、一方の極には謙遜と追従（おしよ）、他方には逆に尊大と嘲りの笑いがあらうというぐあいなのである。

重ねて念をおすが、この範疇化はけつして理性の産物ではなく、笑いを外側から観察してつくつた分類ではない。それはちょうど、先に述べた「歩くこと」と「走ること」と同様、身体運動そのものが内側から生みだし、運動感覚それ自体が直接に行っている範疇化である。いいかえればそれは運動がリズム化されるとき、リズムの感觸そのものとして知覚される運動の類別であるが、そのさい笑いはとくにリズム構造を多様に持つ運動だといえる。日本語の擬声語、擬態語を見ればそのことは明白であつて、「にやにや」「にっこり」に始まつて、「へへへへ」「あはは」「わはは」など、音質のみならず分節構造の種類そのものが多数に渉（わた）つてゐる。くしゃみや咳、泣くことに比べて、笑いはリズム性のより強い運動であり、そのことが笑いの自己範疇化を厳密にし、一段と言語に近い表現能力を与えたといえるだろう。

(山崎正和『社交する人間』より)

〔注〕流動性と拍節：筆者は別の部分で次のように記している。「リズムミカルな運動は拍節と流動性の両面からなりたつてゐる(略)。運動の流動性は力がまえに進もうとする勢いであり、拍節はそれを区切つて堰（せき）とめようとする働きであるが、リズムにおいてはこの逆の作用があつてをたがいに強めあう關係に立つ」。

コケティッシュ……なまめかしいさま。男の気をひくさま。

問一 傍線部1はどのような状態を指すか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 自然と文化の間にある多様な生活を主体的に操作しつつ営む状態。
- b 法やマニュアルにとらわれず、精神的な自由を享受している状態。
- c 自然の反射現象にしたがうままに快適に生活を営める状態。
- d 生活の意識化が進んだ結果、法やマニュアルによって生活を律するようになった状態。

問二 傍線部2に合致するものとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 行動を自覚的に秩序づけるにしたいが、生活はより文明に近づく。
- b 生活の中に機械的、図式的な規則を取り入れると、生活はより自然に近づく。
- c 生活の意識化が縮小されるほど、生活はより文明に近づく。
- d 純粋に自然的な身体的現象を重視しつつ生活を営むほど、生活はより文明に近づく。

問三 傍線部3に合致するものとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 咳の現れかたは文化の制約のもとにあり、一定程度意識的な行動である。
- b くしゃみの現れかたは社会ごとの慣習的な規則に影響を受けていない。
- c 唾液の分泌は食物についてのタブーとは無関係に生じる。
- d 暗がりの中で拡大する瞳孔は、社会ごとの慣習的な規則に影響を受けている。

問四 傍線部4のように筆者が考えるのはなぜか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 咳はくしゃみよりも意識の統御のもとにおかれているから。
- b 咳はくしゃみよりも自然科学的な反応のように見えるから。
- c 咳はくしゃみよりも喜劇的な意味を帯びやすいから。
- d 咳はくしゃみよりも刺激に対する無条件の反射に近いから。

問五 空欄X、空欄Yに入れるのにもつとも適切な語句の組み合わせを次の中から一つ選べ。

- a X…固定的、Y…くしゃみ
- b X…可塑的、Y…言語
- c X…抽象的、Y…瞳孔
- d X…律動的、Y…咳

問六 傍線部5はどういうことか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 悲しみという感情の衝迫が激しいほど、泣く行為の運動量が増大し、泣き声は恨み、怒り、甘えなどの多彩な意味を帯びる。
- b 泣く行為の表現力は高く、その多様性はくしゃみや咳と同等であり、その運動量もくしゃみや咳に比肩する。
- c 内面の悲しみの強さこそが、他人に悲しみを表現しようとする意欲の強さよりも、泣く行為の運動量に強く作用する。
- d 泣く行為は悲しみという感情にとどまらず、他の多様な感情をも表現するが、その運動量は必ずしもこみあげる悲しみが強ければ強いほど増大するわけではない。

問七 傍線部6はどういうことか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 泣く行為はつねに泣く行為を促す他人の協力がある状況が必要とする。
- b 泣く行為は、自己の内に切迫する感情によって促進される。
- c 泣く行為は自己を完全に屈伏させる強者がいることで成り立つ。
- d 泣く行為はそのふるまいを見つめ、自他の関係を意識させる他者がいることで成り立つ。

問八 傍線部7の「笑い」について筆者はどのように考えているか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 笑いは泣くことに比していつそうリズム性が強い運動である。
- b 笑いは泣くことに比していつそう自己防衛のための努力を必要とする運動である。
- c 笑いは泣くことに比していつそう共感の獲得のための労力を要する運動である。
- d 笑いは泣くことに比していつそう感情の衝迫を内側に生み出すために力を割かねばならない運動である。

問九 傍線部8はどういうことか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 笑いが表現できる意味内容を特定の感情だけにする。
- b 親愛の念を向けるべき相手の範囲をはっきりと確定する。
- c 笑いが生じる場面や文脈をきわめて限定的なものにする。
- d 曖昧さを排した形で多様な意味を相手側に伝達する。

問十 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選べ。

- a 生活がリズム構造を帯び、生活の意識化が極大に近づくとき、生活が文化的になる。
- b 「けいがい聲咳」という成句は、咳が生じる機構がほとんど自然科学的であることをよく物語っている。
- c 泣く行為は、恨み、怒り、甘え、巧まれた同情の要求など、多様な感情的意味を表現できるが、それを読み取る側が泣く行為の意味内容を明確な言葉に移すのは難しい。
- d 泣く行為は笑う行為に比していっそう厳密に統御された行為であり、さら*に*いっそうリズムの両義性を帯びて成立している。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

それ歌はことばを長うして心をやるものなり。然るを、「心1に思ふ事を見る物きく物につけていひ出だせるなり」とのみいひては未だつくさず。古事記・日本紀等に見えたる、伊邪那岐・伊邪那美命の「あなにやし えをとこを」、「あなにやし えをとめを」と唱へ給へるは、心におもふ事をいひ出だせるなり。されど、これをば「のたまふ」といひて、「歌」といはざるは、ただ唱へ給へるのみなればなり。須佐之男命の「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を」とのたまひしも、同じく心に思ふ事をいひ出だせるなれど、これをばまさしく「歌」といへるは、うたひ給へるなればなるべし。また、あぢしき高日子根の神の妹、高姫の命の「天なるや おとたなばたの うながせる 玉のみすまる みるまると あな玉はやみ谷ふた渡たらず あぢしき高日子根の 神ぞや」といへる歌も、高日子根の神の名を、その時ありあふ人に表はさんとして、歌よみたると見えたり。これもうたはざれば、ありあふ人の聞くべきにあらず。されば、うたひたる事知るべし。から国の歌を見るに、また同じく然り。擊壤の歌は、確かなる書にも出でざれば、暫く措きて論ぜず。尚書の益稷にある、帝舜・皋陶の歌ぞ、六経の中にて初めて見えたる歌にして、すなはちうたひ給へるなる事は、益稷の文にて明らかなり。

7 げにうたはざれば心をやるべからず。うたふには、ことばを長うすべし。然れば、わが国もから国も、歌はうたふ物にこそありけれ。うたはんとて作る物なれば、よの常の詞とは全くは同じかるべからず。一句の文字の数も必ずしも定まるべからざれど、大むね五言・七言をたたむ事、から国の昔の歌の、大むね四字を以て一句とするに同じく、うたふ声の長短の程よからんがためなり。然るに、高姫の命の歌の末は、六言・九言・十言・四言などの句なれば、句の長短等しからずして、「八雲たつ」の歌、及びその外の神代にある歌よりも劣りて聞こゆ。されば、古事記にも日本紀にも、これを「ひなぶり」といへり。また、火々出見の尊に至りては、豊玉姫と贈答の歌あり。贈答なればうたふにはあらずといはん。されど、この時世の贈答は、後世男女相聞に歌を書きて、相贈る類にはあるべからず。各心をやらんために歌を作りてうたひ、そのうたふ所を、思ふ人に贈り示すなるべし。うたはずしてただ贈らんには、常の詞を用ゐて、そのいはんとする事をば尽し、そのいふに及ばぬ

詞をば加ふべからず。「白玉の君が」といひ、「沖つ鳥鴨」とのたまへるをもておもふに、その作る所は、うたはんとて作りたる物にこそ見ゆれ。これより外、古事記・日本紀等に見えたる歌ども、皆これうたふ所なるべし。その中、あるいは句の長短等しきあり、あるいは等しからざるあり。等しき中にも、語路のよろしからずして、口にとどこほるあり、等しからざる中にも、句調の整ほりて、口にとどこほらざるあり。この時世は、詞花言葉をもて断はぶ時にあらざれば、よく風情・景色を摸したる歌はなし。もし歌の優劣を論ぜば、長短等しくして、句調整ひたるを優とし、長短等しからずして、語路とどこほりたるを劣とすべけれど、その優劣を論ずる事も見えず。ただその口に出づるにまかせて、うたひたるを伝へたと見えたり。

(荷田在満『国歌八論』)

〈注〉

○うながせる…うなじにかけていらつしやる。

○撃壤の歌…中国古代伝説上の五帝の一人堯の時代に、天下泰平を喜び歌つたとされる。

○火々出見の尊…海幸彦の弟、山幸彦。神武天皇の祖父。海神の娘豊玉姫と結婚。豊玉姫は別れて海神の国に帰つた後、夫山幸彦を恋しく思い歌「赤玉は緒さへ光れど 白玉の君が装し 貴くありけり」を贈り、山幸彦も歌「沖つ鳥鴨着く島に 我が率寝し 妹は忘れじ 世のついで尽に」を返す。

問一 傍線部1は、誰の言か。次の中から適切なものを一つ選べ。

- a 紀貫之 b 紀淑望 c 紀時文 d 紀友則

問二 傍線部2「未だつくさず」とあるのは何故か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 韻律がなければ歌ではないから
- b 声に出して歌ってこそ歌であるから
- c 感動が言葉となるとは限らないから
- d 感嘆詞を羅列しても歌にはならないから

問三 傍線部3はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a その時に居合わせた人々の前で顕彰しようとして
- b その時にめぐりあった人々の前で顕彰しようとして
- c その時に居合わせた人々の前で表明しようとして
- d その時にめぐりあった人々の前で表明しようとして

問四 傍線部4「撃壤」と組み合わせ四字句を作るのにもっとも相応しい語を次の中から一つ選べ。

- a 鼓腹
- b 破壊
- c 驅逐
- d 粉碎

問五 傍線部5「六経」とは、五経と『楽記』である。五経に含まれぬものを次の中から二つ選べ。

- a 詩経
- b 易経
- c 大学
- d 論語
- e 春秋

問六 傍線部6の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 声に出して帝舜・皐陶に歌い申し上げたものであることは
- b 帝舜・皐陶が声に出してお歌いになったものであることは
- c 帝舜・皐陶に声に出して歌っていたものであることは
- d 声に出して帝舜・皐陶に歌をお授けなされたものであることは

問七 傍線部7はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 本当に声に出して歌わなければ、心に届けることはできない。
- b なるほど声に出してはじめて、完全な歌ということができる。
- c まことに声に出して歌ってこそ、慰めとなり得るのである。
- d いかにも声に出すことが、心を贈ることになるのである。

問八 傍線部8はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 声の大小を組み合わせることで音調を整えるための方法である。
- b 声の高低を織り混せて美しいメロディーを奏でるための手段である。
- c 音節数を整えることでリズムを生み出すための手法である。
- d 声を長くのばしたり、短くしたりすることで歌い方を調整するてだてである。

問九 傍線部9「いふに及ばぬ詞」として適切でないものを本文中の破線部KLMNから一つ選べ。

- a K八雲立つ b Lみすまるに c M白玉の d N沖つ鳥

問十 傍線部10はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 現代は表現美を愚弄する時代ではないので、趣き深い様子や風景を描写した歌はない。
b 現代は表現美を重んじる時代ではないので、情趣ある場面や情景を模倣した歌はない。
c 記紀歌謡の時代は表現美に拘泥しなかったため、趣き深い場面や情景を写した歌はない。
d 記紀歌謡の時代は表現美を楽しまなかったため、情趣ある表現をまねた歌はない。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の關係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

四月十日夜、樂天白^{まうス}微^ミ之、微^ミ之、不^ル見^ル足^ノ下^ノ面^ヲ、已^ニ三年矣。不^レ得^ル

足^ノ下^ノ書^ヲ、欲^シ二^一年矣。人^シ生^ル幾^ク何^カ、離^リ闊^{カフ}如^シ此^ノ、況^ヤ以^テ膠^ノ漆^ノ之^ノ心^ヲ、置^ク於^テ

胡^コ・越^{エウ}之^ノ身^ニ。進^{ンデ}不^レ得^ル相^フ合^フ、退^{イテ}不^レ相^フ忘^ル。牽^{ケン}攀^{ケン}乖^{カイ}隔^{カク}、各^ニ將^ス白^ク首^ヲ。

微^ミ之、微^ミ之、如^ク何^カ、如^ク何^カ。天^ニ実^ス為^レ之^ヲ、謂^フ之^ノ奈^ニ何^カ。僕^メ初^メ到^ル潯^ル陽^ノ時^ニ、有^リ熊^ウ

孺^{ジュ}登^{トウ}来^ル。得^{タリ}足^リ下^リ前^ニ年^ノ病^ヲ甚^{ダシキ}時^ノ一^ツ札^ヲ。上^ニ報^ジ疾^ヲ状^ヲ、次^ニ叙^シ病^ノ心^ヲ、終^ニ論^ズ

平^{ヘイ}生^ノ交^ウ分^ヲ。且^ツ云^フ、危^{テツ}懼^レ之^ノ際^ニ、不^レ暇^{アラ}及^レ他^ニ、唯^ダ収^メ数^ノ帙^ノ文^ヲ章^ヲ、封^{ジテ}題^{シテ}其^ノ上^ニ

曰^{ハク}、他^ノ日^ニ送^リ達^ス白^ニ二^一十^二郎^ニ。便^ニ請^フ以^テ代^シ書^ス。悲^{シイ}哉[、]微^ミ之^ヲ於^{ケル}我^ニ也[、]其^レ若^キ

是^ノ乎[。]又^タ睹^{ミル}所^ノ寄^{スル}聞^ク僕^ノ左^ニ降^ヨ詩^ヲ云^フ、残^レ燈^無焰^{クシテ}影^{トウ}憧^{トウ}、此^ノ夕^ニ聞^ク君^ノ

謫^{タク}九^ニ江^ニ、垂^レ死^ノ病^中驚^キ起^ス坐^ズ、閨^ニ風^吹面^ヲ入^ル寒[。]此^ノ句^ニ他^ノ人^尚不^レ

可聞、況僕心哉。至^{ルマデ}今^ニ、每^ニ吟^{スル}猶^ホ惻^{そく}惻^{そくタル}耳。

(白居易「与微之書」)

〔注〕

○四月十日：元和十二年(八一七)四月十日。

○離闕：離ればなれになつて長く会わない。

○胡・越之身：北方の

胡と南方の越ほど遠く離れている身。

○牽攀乖隔：心ひかれながらも離れている。

○熊孺登：筆者の友人。

○危懼之際：危篤のとき。

○帙：書物を収めるケース。

○白二十二郎：筆者を指す。二十二は筆者の排行。

○憧憬：ゆらめく。

問一 傍線部1「欲二年矣」、3「膠漆之心」、5「一札」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

1 a 二年間待ち望んでいる

b 二年になろうとしている

c 二年目には受け取りたい

d 二年ほど早めたいと思う

3 a 深いこだわり

b 熱烈な思い

c 不穏な気持ち

d あつい友情

5 a 一通の手紙

b 少しのお金

c 一冊の書籍

d 厄除けの札

問二 傍線部2「人生幾何」に込められた筆者の気持ちとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 人生は何のためにあるのだろうか

b 人生は一度限りだ

c 人生は何があるかわからない

d 人生は短いものだ

問三 傍線部4「謂之奈何」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 親しい友人と遠く離れてしまっている状況は、もはやどうしようもない。

b 年老いて親しい友人に会えない状況をどうすればよいのだろうか。

c 病気になって親しい友人に会えない状況をどうにかできるであろうか。

d 長い年月が経って疎遠になってしまった関係をどうすれば修復できるだろうか。

問四 傍線部6「便請以代書」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 自分の文章を白二十二郎が評価するかどうかを手紙として知らせてほしい。
- b 自分の文章を白二十二郎に送付して、添削して送り返してもらいたい。
- c 自分の文章を送って読んでもらうことで、白二十二郎に手紙を出すことにかえたい。
- d 自分の文章を綴ったものと、白二十二郎の書籍とを交換してもらいたい。

問五 傍線部7「此句く心哉」の書き下し文として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 此の句すら他人の尚ほ聞くべからず、況んや僕の心にや。
- b 此の句 他人すら尚ほ聞くべからず、況んや僕の心をや。
- c 此の句と他人すら尚ほ聞くべからず、況んや僕の心なるかな。
- d 此の句は他人に尚ほ聞くべからず、況んや僕の心をや。

問六 傍線部7「此句く心哉」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a ほかの人であつても聞くにたえない悲しさであるのに、自分の気持ちとしてはなおさらだ。
- b この詩であつても他人の詩よりは寂しいものなのに、ましてや自分の心をうたつた詩ではなおさらだ。
- c ほかの人にこの詩について聞くことはできないのに、自分の詩についてはなおさら無理だ。
- d この詩とほかの人との関係すら不明であるからして、自分との関わりがわからないことはなおさらだ。

問七 文中のX・Yに補充するものとして、もつとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

X a 敢 b 能 c 徒 d 如

Y a 軒 b 室 c 山 d 窓

問八 文中の波線部「微之」は、筆者の友人の字である。その姓名として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 元稹 b 杜甫 c 孟浩然 d 李商隱

